

会話文における人物設定と物語展開が授業に活用されるのか¹

—中国人日本語教師を対象とするインタビュー調査—

朱 桂 栄*・楊

鎔 溪**・彭 子 燕***

1. はじめに

中国の日本語教育において、教科書は教師が授業を展開する上で欠かすことのできない重要なものである。中国の日本語教科書の歴史を見ると、80、90年代の日本語教科書はほとんど文法シラバスを採用し、会話文に関しては、登場人物と場面の設計に具体性が欠け、文型を学ぶことが重要視されていた。しかし、21世紀に入って以来、日本語教育の理念が変わりつつあり、コミュニケーション能力の育成が提唱されるようになった。そして、日本語教科書の編集に関して、会話文における登場人物や物語展開も工夫され、登場人物の間のやり取りを通して、言語使用や異文化コミュニケーションなどの場面や内容を示す教科書が増えてきている。朱・彭・楊 (2024) は、教科書編集の観点から中国の大学で広く使われている《総合日語》(彭広陸・守屋三千代(総編集者)、以下『総合日本語』と呼ぶ)を分析し、その教科書における人物設定が比較的鮮明で一貫性と真実性があることが分かった。いわば、『総合日本語』は、人物設定における内部的体系性と外部的有効性がある程度保障されていることが分かった。一方、言語教育の観点から見れば、教科書における豊かな登場人物の設定や物語展開は、言語学習と異文化理解に必要なシチュエーションを提供することになると思われる。しかし、これまで教師による

文法説明が重視されている中国の日本語教育現場では、教科書における人物設定と物語展開がどの程度日本語教師によって意識されているのか、そしてどの程度日本語の授業に活かされているのかはまだ不明である。本研究は、朱・彭・楊 (2024) の姉妹編として、上記の課題を巡り、中国の大学の日本語教師を対象とするインタビュー調査を通して検討する。

2. 先行研究

2018年に《普通高等学校本科专业类教学质量国家标准》(筆者訳：大学の学部専攻教育の質に関する国家基準)が発表された。そして、2019年に「学部教育改革を深め、人材育成の質を全面的に高めることに関する意見」が発表された。つまり、中国の大学における人材育成の質を高めるために、教育改革が迫られているのである。さらに、2020年に発表された《普通高等学校本科外国语言文学类专业教学指南》(筆者訳：大学の外国語専攻における教育の手引き)では、日本語を専攻する大学生の素養・知識・能力に関する明確な要求が提出された。例えば、素質面では正しい世界観、人生観と価値観、好ましい道徳観と社会責任感、中国への深い感情と国際的な視野、人文と科学の素養及び協働精神、職人気質、革新精神を備えた人材の育成を目標とする。知識面に関しては、日本語言語文化知識、日本の国情に関する知識、中国語言語文化知識、関連分野の知識、人文社会科学と自然科学の基礎知識を有し、学際的な知識構造

* 北京外国語大学北京日文学研究センター・准教授

** 同・院生

*** 同・院生

を形成する。能力面に関しては、日本語運用能力、翻訳能力、文学鑑賞能力、異文化コミュニケーション能力、批判的思考力、研究能力、創発能力、情報技術応用能力（ICT能力）、自律学習能力、実践能力を持つ人材を育成する。いわば、高度で総合的な人材の育成が目指されている。これらの目標の実現は、従来の日本語授業のやり方への見直しを促し、日本語教師の教育観の更新と教育方法の改善を求めている。

一方、中国の日本語教師の授業において教科書使用を離れては語ることはできない。李（2021）は、教科書使用は教科書に対する正しい理解を前提としていると指摘している。吉（2016）は、4人の日本語教師を対象にある日本語教科書の使用現状を調べた。その結果、教師が使っている教科書の特色と不足点をはっきり認識し、授業で教科書の長所を活かし、短所を補うことを提唱した。宋（2022）は中国の大学の日本語教師130名を対象に教科書使用に関するアンケート調査を行った。その結果、「93.08%の日本語教師が授業展開における教材の重要性を認めている」「73.08%の日本語教師が自分の教材使用が授業効果の実現において重要であると考えている」「80%の日本語教師は、現在使っている教材の構成や内容、編集理念及び提唱している授業方法を把握している」「81.54%の日本語教師が授業において教材内容を調整したことがある」「91.54%の日本語教師は自分の教材使用を振り返り、そして振り返りを通して、86.15%の日本語教師は教材使用における自分の不足に気づいた」ことが分かった。これらの結果から、中国では多くの日本語教師による教科書使用の状況は良好であるが、まだ改善の余地があることが示された。質の高い日本語教育を実現するために、日本語教師が教材をどのように認識し、使用しているかを調査する研究は重要であろう。

3. 研究概要

3.1 研究課題

本研究は、教科書における人物設定と物語展開が日本語授業に活かされているのかという問題について、顕微鏡的な観察法を通して、日本語教師による教科書使用の一側面を明らかにし、人材育成につながる効果的な教科書使用について提言する。具体的には、日本語教師は教科書の会話文における人物設定と物語展開をどのように評価しているのか、教科書の会話文における人物設定と物語展開をどのように活かしているのか、なぜそうしているのかという視点から追究する。

3.2 研究対象と調査方法

本研究の対象とする教科書は、2004年より北京大学出版社に出版された『総合日本語』（彭広陸・守屋三千代（総編集者））という教科書である。この教科書は大学に入ってから日本語を習い始める大学生を対象とする。数多くの大学の日本語学科の基礎段階の2年間は、この教科書の第1冊から第4冊までを使う。『総合日本語』には固定的な登場人物の設定と物語の発展があり、本研究の研究対象としてふさわしいと思われる。

『総合日本語』の会話文における登場人物と物語展開の使い方及び教師の考えを知るために、本研究は質的な研究方法を採用する。具体的には教師にインタビューし、集めたデータに基づいて分析する。本研究は、ある全国的な日本語教師研修に参加した教師から直接インタビューの協力及び協力者の紹介を得られた。最終的には『総合日本語』を使って「基礎日本語」という授業を担当した経験のある7名の大学の日本語教師を協力者とした。

表1 協力者の情報

名前	所属大学の位置	年齢	最終学歴	専攻	肩書き	教員としての在職年数
A	江西省	50代	修士	日本語学	准教授	25年
B	陝西省	40代	博士	比較文学	准教授	18年
C	四川省	40代	博士	民族学	講師	15年
D	河北省	40代	修士	日本語学	講師	12年
E	河北省	30代	博士	日本語学	講師	9年
F	北京市	30代	博士	経済学	講師	4年
G	北京市	30代	博士	日本語教育	講師	4年

表1に示すように、7名の日本語教師は全員女性である。年齢に関して50代は1人、40代と30代はそれぞれ3人いる。学歴に関して、博士号を取得した教師は5人で、研究分野はそれぞれ比較文学、民族学、日本語学、経済学、日本語教育学である。修士号を取得した教師は2人で、研究分野は日本語学である。教師たちの所属大学の所在地は、江西省（東南部）、陝西省（西部）、四川省（西南部）、河北省（北部）、北京市（北部）である。肩書きに関して言えば、准教授2人以外に、他の5人は全員講師である。また、在職年数から見ると、一番長いのは25年で、一番短いのは4年である。

上記の日本語教師に対し、オンラインでインタビューをした。筆者ら3人が参加し、第一著者がメインで質問し、最後にほかの2人の著者が補足質問をした。インタビュー内容は、「1. 『総合日本語』における人物設定と物語展開をどのように評価していますか。2. 教科書における人物設定と物語展開と学生の日本語学習には関係があると思いますか。あるとしたら、どんな関係性があると思いますか。3. 実際の授業で日本語を教える時、それらの人物設定と物語とを関連づけたことがありますか。実際にどのようにしたのですか。なぜそうしたのですか」である。1人の日本語教師に対し、インタビュー時間は40分前後である。インタビュー終了後、筆者ら3人がすぐ受けた印象や感想などについて話し合った。その部分も録音した。最後に、すべての録音を文字化し、分析資料とした。筆者らは、文字化資料を複数回読み、本研究の研究課題に関連する部分を抽出し、7名

の日本語教師の教科書使用の特徴を記述する。

4. 分析結果

以下、『総合日本語』における人物設定と物語展開と教師の授業実践との関わりについて、「①この教科書をどのように評価しているか（以下①と略する）、②人物設定と物語展開をどのように活かしているのか（以下②と略する）、③なぜそうしているのか（以下③と略する）」という3つの視点から、個々の日本語教師の状況を整理したうえで、その特徴を抽出する。

(1) A教師について

A教師は50代で25年の教師歴を持つ准教授で、日本語学専攻の修士卒である。『総合日本語』を10年近く使った経験がある。①について、彼女はこの教科書は生活場面における日本語が多く、練習部分が日本語の検定試験に適しているため、試験合格に有利だと評価している。一方、学生たちは自分たちの専門が日本語だという認識が弱いいため、教科書の人物設定や物語展開に対する興味関心が低く、教科書のデザインに対する深い感覚や特定の好みがないと、A教師は評価している。②について、学生たちは授業で主に単語や文法を中心に学ぶが、A教師は王と高橋の恋心を話題にすることがある。また、教科書の内容を巡り、留学や就職など学生の身近な話題や、歴史や文化などの知識を学生に紹介することもある。③について、学生たちの積極性を高めること、将来の進路に有用な情報を提供すること、日本語の背後にあ

る文化や社会の背景を理解させること、会話の中の人物の日本語表現を吟味することを通して異なる場面における言語運用ができるようにするというのがA教師の意図である。A教師が学生の能力と興味関心に合わせ、知識伝達と言語運用を重視する日本語授業を展開していることが分かった。その時、雰囲気作りと言語運用のために教科書における人物設定と物語展開を適宜活かしていると言える。

(2) B教師について

B教師は40代で18年の教師歴を持つ准教授で、比較文学専攻の博士である。①について、B教師は『総合日本語』の人物設定が日常生活に密接し、学生の日常生活や人間関係を反映する場面が多く、学生の共感を呼びやすいと評価している。そして、人物設定などは会話内容を面白くすることができると考えている。ただ、第一冊における美穂の日本語の自己紹介が長く、初心者にとって難しいと感じたと言っている。②について、授業ではB教師は言語の使用場면을重視し、学生に会話を模倣させている。しかし、学生の質の問題や授業時間数の減少などにより、学生は教科書の内容を消化しきれない状態である。従って、B教師の学校で中国人教師は文法を中心とする理解能力の育成に、日本人教師は口頭と文章による産出能力の育成を中心に役割分担をしている。B教師は授業で文法説明をしている時に、中国人と日本人のプレゼントに関する習慣について説明するなど、文化的な内容についても触れることがある。③について、B教師は文法練習の重要性を強調し、異なる場面に応じる正しい表現が重要であると考えている。そのため、言語に焦点を当て、文法の使用を実際の生活場面と関連させることで、学生の日本語の理解能力と産出能力を向上させている。B教師は、知識伝達と言語使用の両方を重視しているため、場面作りのために教科書における人物設定と物語展開を活かしていると言える。

(3) C教師について

C教師は40代で15年の教師歴を持つ講師で、民族学専攻の博士である。①について、C教師は、『総合日本語』の中の物語が日常生活に近く、口頭表現が豊富であると評価している。教科書はやや難しいが、練習問題がしっかりしているので、学生の試験合格率が上がったと言っている。『総合日本語』を使う前に「王と高橋の恋心が描かれて面白い」と若手教師に言われたことがあるが、実際教える時にそれを感じることなく、ただ王と高橋を文化交流の使者だと理解している。そして、李東という人物に深い印象を持っており、若者の考え方と生活様式に非常に近いと述べている。②について、授業ではC教師は教科書に基づき発表活動をさせるが、会話文について主に朗読や模倣をさせる。会話内容と関係のある異文化コミュニケーションの内容も導入している。例えば、第三冊の第7課の会話文における「餃子にりんご事件」について、C教師が「どうして劉が不満に思うか」「あなただったらどうするか」「相手がどうすれば、あなたが満足できるの」などを学生に問いかける。授業中、討論時間も設け、学生に議論させてから中国人と日本人のプレゼントに関する習慣の違いについて説明する。③について、C教師が学生に物語の展開に留意しながら会話文を朗読と模倣をさせるのは、いかに言葉を使って効果的なコミュニケーションができるかについて学ぶことができると考えているからである。王と高橋の性格と行動が異文化理解に役立つが、国民性を表すものではないと考えているので、人物設定を活かしていないと言っている。C教師は、言語使用を重視している中で学生に問いかけ、議論させることを通して、異文化コミュニケーションと思考力の育成を強調している。そのために、問題提起として教科書における物語展開を活かしていると言える。

(4) D教師について

D教師は40代で12年の教師歴を持つ講師で、日本言語文学専攻の修士である。『総合日本語』を6

年間使った経験がある。①について、『総合日本語』は一貫性が強く物語の展開や経緯がよく整っており、教師は常に新しく登場する人物を紹介しなくても体系的に教えられるという利点があると評価している。さらに、『総合日本語』の一課に2つの会話文と1つの読解文という構成が合理的で文章の長さも適切であると評価している。このことから、D教師は初級レベルの学生においてその言語運用を重視しているのが分かる。②について、D教師の学校で、会話文の指導に関して、語彙や文法の説明だけでなく、学生に実践活動もさせる指導法が採用されている。具体的には会話文を真似て生活場面のビデオログをグループで作らせ、クラスで共有し、教師が注意すべき点をフィードバックする。ほかには、時々教科書の主題に限らず、日常的な出来事と関連づけ、背後の考え方に留意させるような指導も行っている。D教師は授業で言語運用を重視し、中日言語の差異を強調し、比較的長い会話をさせることで普段気づかないニュアンスを考えさせながら学生の言語能力を育てている。一方、実際の言語使用に関して王や高橋などの登場人物ではなくても支障がないため、人物設定と物語展開をあまり活かしていないと述べている。③について、D教師は外国語専攻の学生は外国文化に触れ合う過程で、自分のスタンスや価値観をしっかり持つべきであり、そのために教師が正しく導く必要があると考えている。D教師が教科書における人物設定と物語展開をあまり活かしていないのは、価値観を育てるうえで、王や高橋といった人物は国や民族を代表することができず、この2人を巡る話題は学生の思考を引き出すのに十分ではないと考えているのである。人間育成の観点から言えば、むしろ文章の主題の教育的価値が大きいと主張しているのである。このように、D教師は言語使用を中心に、異文化を導入しながら人間育成を大切にする授業を展開している。場面作りのために教科書における人物設定と物語展開を活かしていると言える。

(5) E教師について

E教師は30代で日本語学の博士である。教師歴は9年で、主に「基礎日本語」の授業を担当してきた。①について、E教師は『総合日本語』の物語は現実生活の時間軸と同じであり、真実性があり、内容が濃いと評価している。人物設定について最初は斬新な感じはするが、第3、4冊に至って、だんだん面白みがなくなり、退屈に感じることもあると考えている。また、日本に関する背景知識が足りないため、一部の教科書内容は学生にとって理解しにくいと言っている。②について、授業でE先生は語彙と文法に重点を置いている。会話文の場合、主に語彙や文法を説明してから素早く終わらせ、読解文を中心に質問したり文化知識を紹介したりしている。学生の生活と重なっている教科書内容は適度に展開させるが、言葉の使用を説明するために登場人物の関係を言及したことがある。それ以外、人物設定にほとんど注意を払わず、授業に活かすことはなかった。③について、E教師は『総合日本語』における場面は言語学習に役立つが、それに対し、登場人物の果たす役割が少ないと考えている。例えば、第一冊で故宮を紹介する場面は、高橋と王のような関係ではなくても、文法は教えられるし、ツアーガイドといった人物でも故宮を紹介することが可能であると考えている。このように、E教師は日本語学専攻であるため、語彙や文法を非常に重視している。文法学習上の必要性から会話文の人物設定や物語展開の利用価値をあまり認めていないと言える。

(6) F教師について

30代で4年間の教師歴を持つF教師は経済学の博士で講師である。①について、F教師は文法を教える際に『総合日本語』における一貫性のある内容や登場人物の関係性を自然に取り入れることができるかと述べている。例えば、形容詞や動詞の過去形は、前の授業で習った物語の展開を学習者に思い出させることによって自然に導入することができる。また、登場人物の中の李東という人物

に最も印象が深く、このような誇張された「非主流派」の学生像が学生の関心を引きやすいと考えている。クラスには日本語にあまり興味がない学生が多いので、『総合日本語』の物語や人物設定が面白くて学生の興味を引くのに役立ったと言っている。そして、登場人物や物語だけでなく、『総合日本語』の会話は優れていて実用的であり、テーマに相応しくてまとまりがあるとF教師は考えている。②について、授業で教科書を十分に利用するのがF教師の教育理念である。教科書の内容に応じ、適宜関連知識を補充し、学生とやりとりをしている。例えば、教科書に「相撲」が出たら、関連する文化知識を教える。それに文化知識を教える時も、学生にどう思っているかを問いかけ、文化対立的な視点から捉えないように指導している。差異を相対化し、日本に対するステレオタイプを持つべきではないと考えている。普段の授業において、F教師は、文法や表現の違いについて、中国語による表面的な理解でなく、文脈や場面と関連づけ、日本語の表現を吟味し、その本当の意味を理解することが大切だと強調している。③について、まずF教師自身の経験から分析すると、日本留学の経験が豊かなために、比較的的日本文化や社会を熟知しており、それを踏まえて色々な関連知識が学生とシェアできる。また、F教師は自分の学生時代に『総合日本語』を学んだことがあり、教えてくれた教師から受け継いだ教え方を自分の教育実践に活かしている。さらに、F教師が今担当しているクラスには日本語にあまり興味がない学生が多いので、機械的に学ぶことを変えるために、本来学んだ後に完成する課題を予習課題として授業前に出し、学生の主体性を引き出そうとしている。このようなことから、F教師が従来のやり方を一筋に守るのではなく改革意欲の高い教師であることが分かる。F教師が『総合日本語』を熟知し、自身の豊かな経験を駆使しながら、会話文の人物設定や物語展開を含め、教科書を積極的に活用していると言える。

(7) G教師について

同じ30代で4年間の教師歴を持つG教師は、日本語教育の博士である。①について、G教師は『総合日本語』は、様々な登場人物の関係性で物語を作り、学生の興味を引くことができると考えている。例えば、G教師と学生は王と高橋のラブラインを非常に気にしていることがそれを説明している。そして、個性のある人物設定は学生の文化的視野を広げることができると考えている。一方、G教師はこの教科書の登場人物は2000年以降に生まれた今の大学生らしくないと指摘している。特に教科書における女性について、日本人女性を描いたが、中国人女性はあまり描いていないと指摘している。②について、授業において、G教師は会話文の指導について単語や文章を説明するだけではなく、ロールプレイも取り入れている。学生の創造力を鍛えるため、学生に物語の続きを書かせたいとも話している。そして、登場人物を利用し、よく学生に考えてもらおうきっかけを作っている。例えば、鈴木が変な髪型になり、いくつかの登場人物から異なることを言われる場面では、G教師はそれをきっかけに、「人間関係においてどのように振る舞うべきか」と問いかけ、他人とのコミュニケーションの取り方について学生に議論させた。また、会話文の中の異文化摩擦について、G教師は学生を次のように導いている。例えば、第三冊の第7課における「餃子にりんご事件」について、G教師は学生に「日本だけが贈り物をすぐに返すとは限らないし、中国はすぐ返さず次に返すとも限らない」と伝え、絶対的な判断をしてはいけないと学生に教えた。このように、G教師は学生の考えを聞く姿勢であり、授業中ある話題を巡って熱く議論し、対話の場を自然に作っている。③について、まずG教師自身の経験から分析すると、G教師は日本語教育学の博士号を取得し、留学歴が長く、比較的的日本文化や社会を熟知していると言える。また、G教師は『総合日本語』の編集者が主催した教科書を紹介する交流会に参加

したことがあり、教師自身この教科書の人物設定などについて興味を持っている。

G教師がロールプレイや物語の続きを書かせるタスクを入れるなど会話文を十分に活かしているのは、日本語は色々な形があり、学生が自分の考えや意思を表現できるように自分に合う表現を取ることが重要だと考えているからである。このほか、G教師が教室で対話の場を作ることを重視しているのは、学生が自由に発言することが学生への理解を促進し、結局、教師と学生の間の相互理解やコミュニケーションを促進することになると考えているからである。G教師が教科書に登場する人物に関心を持っていることから、教師本人が自分の学生に対しても強い関心を持っていることが窺える。全体的にG教師はステレオタイプに対する批判的意識を持ちながら、『総合日本語』を通じて学生の興味を引き、物語の登場人物や物語展開を通して学生の文化的な視野を広げつつ、多様性への尊重を育てていると言える。

5. 考察

本研究は、教科書の会話文における人物設定と物語展開が日本語授業に活かされているのかという研究課題に対し、7名の日本語教師を対象にインタビューをした。上記に示したように、教師たちは共通点もあれば相違点もある。以下、3つの分析視点からまとめる。

(1) 『総合日本語』への評価

ほとんどの日本語教師は『総合日本語』の会話文における人物設定が鮮明であり、物語展開が面白く、学生の実生活をよく反映し、学生の興味を引きやすいと評価している。これは朱・彭・楊(2024)で分析した当該教科書の内部的体系性と外部的有効性に関する結論と一致している。そして、会話文だけではなく、文法の体系的な練習の充実さについても『総合日本語』は教師からの評価を得ている。

一方、この教科書の人物設定には中国人女性が少ないなどの偏りがあると指摘した教師もいる。人物設定といった教科書の隠れたメッセージを批判的に捉える教師はまだ少数であるが、日本語教育出身の教師による鋭い意見だと思われる。

全体的に好評を得たこの教科書は、よい授業活動を行うのに必要な条件を整えたと言える。

(2) 『総合日本語』における人物設定と物語展開の活用

言語教育であるため、授業の中でほとんどの教師は言語知識と言語運用を重視している。ただし、学生の興味関心、学習能力、授業時間数、教師の専攻領域、教師の教育観などにより、授業における会話の中の人物設定と物語展開の活用状況が様々である。活用の目的に関して、雰囲気作りのために活かす教師もいるが、多くは言語使用を促す場面作りのために活かしている。少数ではあるが、学生の思考力を育てるために人物設定を問題提起に活用する教師が目立っている。ほかには、文化知識を説明するために物語を活かしている教師も多く見られる。活用の仕方に関して解説するという方法を取る教師が多いが、その中に学生に問いかけ、学生に考えてもらう教師もかなりいる。また、少数であるが、異文化摩擦を反映する会話内容について、中国文化と日本文化を対立的に見るべきではないと指導する教師の存在が目立っている。

(3) 活用の目的と仕方の背後にある教師の教育観

集めたデータに基づいた7人の教師の中では、学生に言語知識を説明し、学生の言語運用能力の育成を授業目標とする教師がほとんどである。これは「事実」「概念」「技能」を重視する考えである。しかし、教育目標を設定する時に「事実」「概念」「技能」だけを考えるのは不十分である。石井(2020)は「知の構造」を示している。それは、事実を記憶し、概念を理解し、技能を実行でき、方略を適用でき、見方・考え方に基づいて知識・技能を総合するという「知の構造」である。今回、

見出した教師の教科書における人物設定と物語展開の活用の目的と仕方から、教師による「知の構造」への認識の差異が見られたと言える。D教師は価値観を育てることを重視しているが、文章の主題と比べ、人物設定と物語展開による教育的価値が低いため、ほとんど活かしていない結果になる。E教師のように、語彙や文法の知識を教えることを教育の目標としているので、会話文の人物設定や物語展開の利用価値を認めていないという結果になった。一方、F教師のように、一つ一つの課を単独に捉えるのではなく、一つの延長線で学びを捉え、学生の経験と知識のつながりを重視する考え方もある。そのために、人物設定と物語展開を様々な知識を繋げるのに活用した。また、G教師のように、言語教育の目標を人間育成と捉え、そのために、会話文の中の人物にも興味を持っていると同時に目の前の学生にも関心を持っている。対等的な関係の中で、人物設定と物語展開を通し、教師と学生間の対話及び学生と学生間の対話を実現させた。

以上を踏まえ、言語教育の目標をどのように設定するか、教師が言語教育において何を重視するかによって、教科書の活かし方が異なってくることが示唆された。

6. おわりに

本研究は、日本語教師が『総合日本語』を使って授業を進める時、どれだけ教科書の会話文の中の人物設定を意識し、意図的に日本語の学習活動に活かしているのか、インタビューを通して日本語教師の教科書使用を考察した。その結果、教師の授業目標の設定などに関する課題を見出した。授業展開において、「知の構造」を意識する目標設定が重要である。つまり、日本語の授業において、言語知識や言語運用能力だけでなく、異文化理解などを巡る見方・考え方なども視野に入れる全人的な人間育成を目標にすることが重要であ

る。全人的な人間育成の目標があるからこそ、利用可能なすべての要素に対して敏感になり、創造的に教科書を使用することが可能であると言える。

今後の課題として、教科書使用に関して、教師の側面だけでなく、学生の側面も調査し、中国の日本語教育の質的向上に役立つ情報を提供する。具体的には、学生が『総合日本語』を使って日本語を学ぶ時、これらの人物設定をどのように評価しているのか、学生が教師の教科書使用に対してどんなことを期待しているのかなどの課題についてさらに追究したい。

注

1：本研究は北京外国語大学「中日两国大学外语教材‘国家形象’比较研究”の一部である。

参考文献

- 朱桂榮・彭子燕・楊鎔溪「中国の大学の日本語教科書における登場人物の設定に関する研究」『比較日本学教育研究部門研究年報 20』, 2024. 刊行予定.
教育部高等学校教学指导委员会.《普通高等学校本科专业类教学质量国家标准》[M]. 高等教育出版社, 2018.
教育部高等学校外国语言文学类专业教学指导委员会.《普通高等学校本科外国语言文学类专业教学指南》[M]. 外语教学与研究出版社, 2020.
李功连, 教科书使用共同体：内涵、特征及实践 [J]. 课程. 教材. 教法, 2021, (12).
吉金金.《基础日语综合教程第一册》使用情况调查分析 [C]. 厦门大学外文学院第九届研究生学术研讨会论文集, 2016: 180-189.
宋甜甜. 关于中国大学日语专业教师教材使用的研究 [D]. 2022年北京外国语大学硕士论文.
石井英真 (2020)『授業づくりの深め方ー「よい授業」をデザインするための5つのツボ』ミネルヴァ書房